

27年度版教科書つれづれ 24 「世界一美しいぼくの村」（東京書籍・小学4年）の巻

加藤 郁夫（読み研事務局長）

「世界一美しいぼくの村」は、アフガニスタンの話である。パグマン村に住むヤモという男の子がお父さんと一緒にまちにすももやさくらんぼを売りに行くある一日を描いた作品である。小林豊作・絵の物語教材であり、23年度版と27年度版を比べると教材本文には挿し絵やレイアウトも含めて一切変更はない。一番大きな変更点は、27年度版からは「読書の部屋」に「世界一美しい村へ帰る」という読編が掲載されたことである。それにもなつて学習課題に大きな変更がなされている。

23年度版では、次のような課題が示されていた。

家族やふるさとを思う心をえがいた本を読もう

●家族やふるさとを思う心をえがいた、いろいろな本を読みましょう

27年度版では、次のようになっている。

読書会を開こう

◆物語を深く味わうために、つながりのある本をあわせて読む

◆物語の中の文や言葉を引用してしょうかいする

この課題で気になるのは、「物語を深く味わうために、つながりのある本をあわせて読む」というところである。

「つながりのある本」を読むことはいい。それが「物語を深く味わう」ことにつながっていくこともある。しかし、それだけではあまりにも安易過ぎはしないだろうか。新版で「世界一美しい村へ帰る」を収録したことで生まれた課題なのであろうが、この課題を設定したことで逆に「世界一美しいぼくの村」をどのように読むのか、あるいはそこから何を学ぶのかといった課題が曖昧にされてしまったように私には思える。

「世界一美しいぼくの村」は、ポプラ社の絵本『せかいいち うつくしい ぼくの村』に基いている。これは1995年に出版されたもので、文章も絵も小林豊氏である。翌1996年に『ぼくの村にサーカスがきた』、2003年に『せかいいち うつくしい村へ かえる』が出ており、三部作になっている。

二作目『ぼくの村にサーカスがきた』は、ヤモの友達のミラドーが村に来たサーカスについて村を出て行くという話である。時間的には、一作目『せかいいち うつくしい ぼくの村』で描かれた、ヤモが町に行った年の秋の出来事として描かれている。そして三作目『せかいいち うつくしい村へ かえる』では町を出て行ったミラドーがパグマンに帰ってくる話で、一作目で示された戦争で村が破壊されたあとの話になっている。

確かに「世界一美しい村へ帰る」を読むことで、ヤモがどうなったかを知ることができる。またその最後が「春、村は緑でいっぱいになるでしょう。」と、希望を持った終わりになっており、「世界一美しいぼくの村」のラストの衝撃を和らげることもできるだろう。

ただ、私が気になるのは、つながりのある本を読めば、物語を深く味わうことができると安易に結論づけているように見えることだ。「世界一美しいぼくの村」自体を、どのように読んでいくの

か、あるいはそこからどのようなことを学び取るのか、そういった課題が脇に追いやられてしまった印象を受ける。

絵本を見て驚いたことは、絵本と教科書掲載作品とは全く別物だということである。「世界一美しいぼくの村」は、アフガニスタンの話である。しかし、絵本の本文には、アフガニスタンという言葉は一度も出ていない。あとがきに相当する《もっとパグマン村のことを知りたい人へ》のところで、はじめて絵本の舞台が「アジアのどまんなかにある国、アフガニスタン」と説明されている。ちなみに教科書本文冒頭の1段落は、このあとがきのところからとられたものであり、『せかいいち うつくしい ぼくの村』の本文にはない。

同じ小林豊氏の絵本に『ぼくは弟とあるいた』(岩崎書店 2002年)という作品がある。戦争が近づいてきたので兄弟がおじいさんの元へ避難していく旅の様子を描いた作品である。この作品でも、絵と人物の名前から日本ではないことはわかるものの、どこという場所を特定する言葉は何も書かれていない。絵本のカバーの最後に「この絵本はカスカス地方とバルカン半島を舞台に描きました。いま、世界中どこにでもあるお話です。」と小さく記されている。『せかいいち うつくしい ぼくの村』の本文にアフガニスタンが出てこないのも、作者の中に「世界中どこにでもあるお話」といった思いがあるからではないだろうか。

また、教科書本文の最後の一文「その年の冬、村は戦争ではかいされ、今はもうありません。」は絵本でも最後に置かれているのだが、そのページだけベージュ色で、絵は描かれておらず、文字だけが真ん中に配置されるというレイアウトで、明らかにそれまでのページとは異なっていることが一目で分かる。ヤモが家に帰り、子羊を「バハール」と名付け、兄の帰りを待ちわびるところまでは、絵と文章が一体のものとして描かれている。その後、前述したベージュ色のページがあり

この としの ふゆ、

村は せんそうで はかいされ、

いまは もう ありません。

という、三行がページの真ん中に書かれている。このページだけ、これまでのページと違っていることが一目瞭然の書かれ方なのである。

教科書でも、最後に「その年の冬、村は戦争ではかいされ、今はもうありません。」という一文がページを変えて置かれている。しかしそこには、家族が手を繋いで遠くを見ている様子をうしろから描いた絵(絵本では裏表紙に描かれている絵)が配置されており、絵と文章が一緒になっている。したがって、絵本ほどには、それまでのページと質的に違うものであるという印象は受けない。言い換えれば、教科書本文は「アジアの真ん中にアフガニスタンという国があります。」から始まり「その年の冬、村は戦争ではかいされ、今はもうありません。」までが、一つの作品であるように構成されているのである。しかし、絵本は、

すもも、さくら、なし、ピスタチオ。

はる。

パグマンの 村は、はなで いっぱいに なります。

という文字と、ピンクや白い花が咲き誇っている村の様子を描いた見開き二ページから始まり、ヤモが家に帰ってくるまでがひとまとまりのものとして描かれ、最後にベージュ色のページが付け足されているのである。絵本と教科書では、村が戦争で破壊されたという最後の一文の持つ意味が異

なっている。絵本は、パグマン村で暮らすヤモのある一日が中心であり、その平和な暮らしが戦争で破壊されたことを付け加えて終わる。それに対して、教科書は、戦争の影とヤモの一日を並行して描いているのである。

また、教科書では村に帰ったヤモが「パグマンはいいな。世界一美しいぼくの村。」とつぶやくのだが、絵本にそれに相当する箇所はない。

たった 1 にち いなかっただけなのに、とても ながい たびから かえったような きが します。

とあり、ヤモは羊を連れて家に戻る。

絵本は、ヤモがはじめてお父さんと一緒に町に行き、すももやさくらんぼを売り、羊を買って帰ってくる、その一日の様子を描くことに中心をおいている。そしてそのような平和な暮らしが戦争によって破壊されたことを最後に示して終わる。

それに対して、教科書はヤモの一日を描きながらも戦争の影がバックに色濃く出され、戦争によってヤモたちの平和な暮らしが破壊されてしまったことに重点を置いている。

絵本と教科書との違いは、細かく見ていけばまだまだある。ただ、それをあげつらうだけでは意味が無いし、子どもたちは教科書で学習をすすめる以上、教科書をどう読むのかという観点で考えていくしかない。ただ、教師はこれらの違いを念頭に置いておく方がよい。

私は、この作品の構造を次のように考えた。

- 冒頭 アジアの真ん中にアフガニスタンという国があります。……
- |
- 発端 でも、今年の夏、兄さんはいません。……
- |
- ◎—— 最高潮＝結末・終わり その年の冬、村は戦争ではかいされ、今はもうありません。

前述したように絵本において、話の中心はヤモが初めて町にでかけ、さくらんぼ売りを体験し、羊を買って帰ってくるという、ヤモという男の子の一日である。だから絵本は「きょう、ヤモは、はじめて ロバの ポンパーと、まちへ くだものを うりに いくことになりました。にいさんの かわりに、とうさんの てつだいを するのです。」と発端がわかりやすく書かれている。

教科書では、同じ箇所が次のようになっている。

あまいすももと真っ赤なさくらんぼが、ろばのポンパーのせなかで重そうにゆれています。今日、ヤモは初めてポンパーと、町へ果物を売りに行くことになりました。兄さんの代わりに、父さんの手伝いをするのです。

この箇所を発端と考えることもできる。ヤモが町に果物を売りに行く一日を事件と捉えるのである。しかし、そうするとクライマックスはその日の内に、もしくはそれとつながっていく日のことではなくてはならない。そうすると、最後の一文は物語の事件からはみ出してしまう。しかし「その年の冬、村は戦争ではかいされ、今はもうありません。」という一文は、あまりにも大きい。それまで描かれてきたものをすべて打ち壊してしまうのであるから。

そしてもう一つ。教科書は、絵本よりも短くなっている。その分、町へ出かけるところから帰ってくるまでの様々な描写がカットされている。その一方でヤモが町についた時の様子は次のように

なっている。

町に着きました。羊の市も立って、にぎやかな声があっちからもこっちからも聞こえてきます。
戦争なんかどこにもないみたいです。いり豆売りのおじさんが大声をはり上げています。……

下線の文は、絵本にはない。平和な描写がカットされ、戦争に関わる表現が加わることで、相対的に、教科書ではヤモの一日に戦争の影が色濃くなっている。

もう一度整理しておこう。教科書では「その年の冬、村は戦争ではかいされ、今はもうありません。」までがひとまとまりの作品であるように掲載されている。したがって、物語の中での一番の変化は、この箇所をおいては考えられない。事件をヤモのある一日ととらえてしまうと、クライマックスと整合性がつかなくなる。そこから、「でも、今年の夏、兄さんはいません。……」という戦争がヤモたちの村にその影響を及ぼしはじめているところを発端と考えたのである。

ただ、授業では子どもたちの多くが「あまいすももと真っ赤なさくらんぼが、ろばのポンパーのせなかで重そうにゆれています。～」で始まるヤモが町へ出かけるところを発端だと指摘してくるだろう。そこからヤモが町に出かける一日の様子が始まるのだし、その前の文は「でも、今年の夏、兄さんはいません。兵隊になって、戦いに行ったのです。アフガニスタンでは、もう何年も、民族どうしの戦争が続いています。戦争は国中に広がり、わか者は次々と戦いに出かけていきました。」とあり、どちらかと言えば説明的な書かれ方である。ましてや「今日、ヤモは初めてポンパーと、～」とある日ある時のことが描かれている。発端と考える、十分な根拠もある。

しかしこの物語は、その「今日」に何かが起こるわけではない。確かにヤモは初めて町に行き、初めて一人でさくらんぼを売り、初めて羊を買ってもらう(ヤモの羊ではなく家の羊なのだが)。「ヤモは、大喜びで村へもどって」くる(この一文も絵本にはないのだが)。ヤモにとってたくさんの初めての経験をした一日だった。そのようなヤモの一日の経験を中心に読み取っていくのであれば、
「パグマンはいいな。世界一美しいぼくの村。」

ヤモは、そとつぶやきました。

のあたりをクライマックスと考えることもできる。この箇所は、題名とも一致する。

しかし、最後の一文の変化の方がそれよりもはるかに大きいのである。この物語が、「ヤモは、父さんにたのんで、白い子羊に「バハール(春)」という名前をつけようと思いました。でも、春はまだ先です。」で終わっていただければ、先の箇所をクライマックスとしてもよいかもしれないが、この物語はヤモが待っていた「春」が来なかったという終わり方をするのである。いや、春という希望の季節どころか、最大の破壊を伴った冬の訪れで物語は終わる。

「あまいすももと真っ赤なさくらんぼが、ろばのポンパーのせなかで重そうにゆれています。～」を発端とした子どもたちは、クライマックスを考えていく中で、物語の発端とクライマックスが噛み合っていないことに気づいていくのではないだろうか。ヤモが町に行った日の中にクライマックスを考えようとすると、最後の一文をどうしたらよいか困ってしまう。かと言って最後の一文をクライマックスと考えると、発端とうまくつながらない。そのような発端とクライマックスのズレから、この物語を捉え直していくような読み方ができるのではないだろうか。

この作品は、一見するとヤモが町に初めていく一日を描いた物語のように見える。しかし、よく読んでいくことで、平和な村(生活)が戦争によって破壊されていく物語へと様相を変える。その二つの物語が重ね合わされていると読むのである。そして、それは単に戦争のおそろしさやこわさを読むだけでなく、私たちのいる日本からそれほど遠くない国(日本からの距離約 6000km)に今

現在、そのような状況が存在していることを子どもたちと一緒に知っていくことにも意味があるのではないだろうか。